

探訪 北の風景 47

ニツ岩と流氷 網走市

青木和弘



2月に入ってからすぐ、網走の流氷着岸の情報が届き現地に向かった。網走市内から能取（のとり）岬に向かう道道76号で、海岸町を過ぎ、明治地区の海岸から、北側の「ニツ岩」を望む。強烈な冷気をまとった海風が、うなりをあげて襲いかかる。風景は白くかすみ、鳥は一羽も飛ばない。カメラを持つ手がこわばって痛い。

流れ着く流氷は、大陸のアムール川の淡水が海に広がり、塩分の薄い上層部の海水がサハリンの北東部で氷結し、北風につつまハリンの東側を南下してきたものだ。一部は、北海道付近で氷結した国産の氷も混ざっているという。動きは風任せだから、風向きが変わると、着岸した流氷が一夜にして沖に遠ざかることもある。中国とロシアの長い国境を流れ、海に注ぐ大河は、流氷によって栄養価の高い肥沃な海をもたらし、豊かな海洋生物を育くむ。オホーツクの恵みは、厳しい冬がもたらすものだ。

オホーツク海は、海面から50メートルまでの塩分の薄い部分と、それ以下の濃い2層の海水に分かれ、混じり合わない。そのため冬の冷気で表面が凍り流氷ができるという。同じ緯度でも太平洋は深いため、海水が対流して、凍る前に春が来るという。北半球でオホーツク海は一番南に位置する凍る海である。

ちなみに流氷の厚さが一番厚くなるのは成長が止まる3月の中ごろで、オホーツク海の北方で約1メートル。北海道付近では40〜50センチメートル。氷山や氷塊は、いくつもの氷板が重なってできるものだ。

網走で人類の生活が始まったのは約2万年前。

5世紀ごろ、オホーツク海沿岸にオホーツク文化が栄え、13世紀ごろまで約800年続いた。オホーツク文化は樺太や千島はもとより、大陸の沿海州からカムチャツカまでオホーツク海をぐるりと取り巻く環オホーツク文化圏を形成していたとされる。網走川河口の左岸にあるモヨロ貝塚はオホーツク文化最大の遺跡として国の史跡に指定されて



国道244号のビューポイントパーキング鱒浦から灯台のある風景を見ることができる。天気が良ければ、その向こうに知床連山が連なる

いる。モヨロ人たちも流氷の風景を眺めたことだろう。

網走で陸上から流氷を確認した、今年の流氷初日は1月28日、着岸は2月2日だった。昨年の初日は1月31日で、接岸は同じ2月2日、海明けが3月6日だった。でも、流氷は気まぐれで、2001年は初日が1月6日で接岸が同8日、海明けが2月15日だった。流氷観光砕氷船「おーら」を運行する道東観光開発は気をもむ。03年には75日も運行でき20万3244人の乗客があったが、気候変動で06年は12日しか運行できず、その後、リーマンショックもあって観光客減少から回復していない。外国人観光客の増加がみられる昨年でも乗客数は9万7181人だった。

流氷観光の代表は、砕氷船「おーら」で、流



能取岬に向かう道道76号沿いの明治地区の海岸から「ニツ岩」を望む。北風で押し寄せられた流氷。モヨロ貝塚から約2.5キロの場所だから、オホーツク文化のモヨロ人たちも、こうした流氷の風景を眺めたことだろう



釧網本線北浜駅に停車した観光列車「流氷物語号」。駅の傍らにある展望台から流氷と列車のある風景を撮影することができる

氷を割りながら進む情景は圧巻だ。景色も良く、お天気にめぐまれば知床連山も見渡せる。流氷を陸から見るなら、能取岬と周辺の海岸線がお薦め。灯台やおオワシ、断崖と凍り付いた滝など見どころが多い。

網走市から南下する国道244号沿いのビューポイントパーキング鱒浦（ますうら）からは赤い灯台が見え、その向こうに知床連山も見渡せる。さらに、鉄道ファンに人気なのがJR北浜駅横にある展望台だ。列車と流氷の風景が見られる。また、同社の観光列車「流氷物語号」は2月28日まで、釧網本線の網走―知床斜里間を1日2往復し、途中、北浜、浜小清水、止別駅に停車する。いざれにしろ、猛烈に寒いので、スキー場なみの防寒が必要だ。